

福澤諭吉の伝統批判に関する先行研究の再評価—仏教を中心に—

Hassan Kamal Hassan

Lecturer Cairo University - Faculty of Arts

Abstract:

In this study, the researcher attempts to re-evaluate the studies concerning the effects of traditional culture in the thought of Japanese thinker Fukuzawa Yukichi (1839-1901). There are many previous studies on Fukuzawa's enlightening thought, and on the negative role of traditional culture in Fukuzawa's thought of modernization, but the studies dealing with Fukuzawa's view towards Buddhism is less and rare. In this paper, the researcher firstly introduces these previous researches dealing directly and indirectly with Fukuzawa's view towards the Japanese traditional culture. Then, the researcher critiques and evaluates these previous researches.

For example, Nishitani emphasizes in his study that Fukuzawa aims to erase traditional culture in order to westernize the Japanese society. The researcher here is completely opposite to Nishitani's thought. In fact, Fukuzawa did not use the word "erase" or "destroy" on talking about Shintouism, Confucianism, or Buddhism in any of his writings (22 volumes). Another example is from Heikidashi's study, in which he describes Fukuzawa as an enthusiastic defender of Buddhism against the spread of Christianity to protect the Japanese identity. The researcher opposed Heikidashi. Indeed, Fukuzawa compared between Christianity and Buddhism, but his comparison was about absolute and celestial beliefs of Christianity compared to flexible and humanely thought of Buddhism. However, Fukuzawa didn't profess about the dangers of Christianity as Heikidashi says. In fact, Fukuzawa himself taught his children ethics using the book "Daily Lessons" Which contains some Christian teachings and terms.

Finally, the researcher draws an original perception of Fukuzawa's view toward the traditional culture, depends on investigating Fukuzawa's full works. The researcher concluded that Fukuzawa does not believe in Buddhism or Confucianism, but he does not also despise or want to erase this traditional culture, as some researchers claim. The

researcher proved through this study that Fukuzawa has a unique relative view not only towards the traditional culture but also to the modern culture. In his book, "Summary of the Theory of Civilization", he relies on three types of measures, namely "time, place and circumstance," on valuing any kind of knowledge whether traditional or modern. He thought that the 19th century and the circumstances was not unsuitable for Japanese traditional culture whether Buddhism or Confucianism. However, changes of circumstances and time may lead to change of priority, advantage and significance.

Keywords:

Fukuzawa Yukichi, Japanese Traditional Culture, Shinto, Buddhism, Confucianism, Enlightenment, Modernization, Westernization

الملخص:

في هذه الدراسة، يقوم الباحث بمحاولة إعادة تقييم الدراسات حول وضع الثقافة التقليدية في الفكر التحديثي للمفكر الياباني فوكوزاوا يوكيتشي (١٨٣٩ - ١٩٠١) والذي يطلق عليه "فولتير اليابان". يقوم الباحث بعرض الدراسات السابقة حول رؤية فوكوزاوا للتحديث في اليابان ونظراته النقدية تجاه الموروث الثقافي الياباني. تعددت الأبحاث السابقة حول فكر فوكوزاوا التنويري في مجالاته المختلفة ولكن تقل وتندر الدراسات حول رؤيته حول دور الموروث الثقافي سلبيا أو إيجابيا في التحديث باليابان. يقوم الباحث أولا بالتعريف بالأبحاث السابقة بشكل عام عن فوكوزاوا يوكيتشي، خاصة تلك الأبحاث التي تتناول بطريقة مباشرة و غير مباشرة رؤية فوكوزاوا للثقافة اليابانية التقليدية. ثم يقوم الباحث بنقد و تقييم تلك الأبحاث في نقاط محددة.

علي سبيل المثال، نيشيتاني يؤكد ان فوكوزاوا يستهدف محو الثقافة اليابانية التقليدية بغرض تغريب المجتمع الياباني. يعارض الباحث هنا تماما فكر نيشيتاني الذي إذا كان يقصد الثقافة الشنتوية كرافد أساسي للثقافة التقليدية اليابانية، فإن فوكوزاوا لم يستخدم كلمة محو في الحديث عن الشنتوية في أي من كتاباته. وإذا كان يقصد البوذية فإن فوكوزاوا كان يدافع عن البوذية ضد الاضطهاد الحكومي ، أما إذا كان نيشيتاني يقصد الكونفوشيوسية و التي يكن فوكوزاوا بالفعل العدا لها، فإن فوكوزاوا لم يصرح بشفة كلمة في أعماله الكاملة (٢٢ مجلداً) تفيد أو تشير من قريب أو بعيد بكلمات مثل "محو" أو "تدمير" للثقافة التقليدية. مثال آخر، هيكيدياشي يقول أن فوكوزاوا كان متحمسا للبوذية كشكل من أشكال الهوية اليابانية وأنه دعي الي مواجهة الديانة المسيحية داخل اليابان. يختلف الباحث مع هيكيدياشي في الآتي: بالفعل هناك مقارنة شهيرة لفوكوزاوا بين المسيحية والبوذية ولكن مقارنته تمحورت حول مطلق أو حتمية

المعتقدات، ولم يدعُ مطلقاً لمواجهة المسيحية كما يقول هيكيديشي، بل إن فوكوزاوا نفسه كان يعلم أولاده الأخلاق مستخدماً كتاب "دروس يومية" الذي يحتوي على تعاليم ومصطلحات مسيحية.

أخيراً، يقوم الباحث بصياغة تصوره الأصيل لوضعية الثقافة التقليدية في فكر فوكوزاوا التنويري؛ وذلك من خلال دراسة شاملة للأعمال الكاملة لفوكوزاوا. توصل الباحث إلى نتيجة أن فوكوزاوا لا يعتقد في البوذية ولا يقدر الكونفوشيوسية ولكنه أيضاً لا يحتقرهما أو يريد محوهما فهما من أهم روافد الثقافة اليابانية التقليدية. يري الباحث -كذلك- أن فوكوزاوا ينظر ليس فقط للثقافة التقليدية بل أيضاً للثقافة الحديثة نظرة نسبية، حيث يعتمد كما يقول في كتابه "ملخص نظرية الحضارة" على ثلاثة أنواع من المقاييس، "الزمن والمكان والظرف"، في حكمه على شتى أنواع المعرفة والفصل في أهميتها وجدواها. فقد يكون المكان غير مناسب للبوذية والزمن غير ملائم للكونفوشيوسية والظرف غير قائم للشنتوية، ولكن قد يتبدل الظرف ويتغير الزمن فتتبدل الأهمية والأولوية.

الكلمات الدالة:

فوكوزا يوكيتشى - الثقافة اليابانية التقليدية - الشنتوية - البوذية - الكونفوشيوسية - التنوير - التحديث - التغريب

宗教は人の心の内部に働くものにて、最も自由、最も独立して、毫も他の制御を受けず、毫も他の力に依頼せずして、世に存すべきはずなるに、我日本に於いては即ち然らず。¹

はじめに

幕末をはじめ明治時代にかけて、日本の知識人の大本願は日本の近代国家の形成を実現させることであつた。彼らは、伝統の迷信を排除し、その拘束から日本人を開放し、科学主義または合理主義に基づく新たな日本人精神を築こうとしていた。その中で、慶應義塾や『明六雑誌』の刊行といった様々な分野において啓蒙活動に力を注いだのが福澤諭吉(1835-1901)や小幡篤次郎(1842-1905)、小泉信吉(1853-1894)らである。福澤らの思想は、日本を伝統社会から近代社会へと変遷させた要因の一つだったといわれている。

本稿では、『明六雑誌』の尽力者の一人である福澤諭吉に焦点に当てる。福澤は、欧米に留学する前に近代文明の知識、とりわけ物理学や医学などに関する知識を検討したうえで、三回欧米へ渡り西洋文明から得た知識を『学問ノススメ』や『西洋事情』、『文明論之概略』など数多くの著作に記し刊行した。また、福澤の影響は当時の日本社会の教育や、政治、経済などに偉大な影響を与

えた。本研究では、日本の伝統に対する福澤の批判を取り扱ってきた先行研究を再検討する。彼と伝統は従来の研究において儒教と結びついているが、本稿では日本の伝統の基盤の一つである仏教に対する福澤の考えに関する先行研究に絞って日本の近代化の一面を明らかにする。

福澤諭吉に関する先行研究は数多くあり、膨大な蓄積があるので、これらの研究を整理する作業は困窮を極めると言っても大げさではないだろう。それは、丸山眞男を含む現在の研究者に至るまでは同様な見解を述べている²。そのため、上述したように、数多くの分野を論じた福澤像に関するすべての先行研究をまとめて批判対象とすることは困難である。本稿では、伝統、とりわけ仏教への福澤の批判に関する従来の研究について検討し、これらの研究者における福澤への評価を紹介し考察する。

本論文の流れは次のようである。第一章では、仏教に関する福澤の批判を扱う研究を紹介する。第二章では、主に疋田精俊氏の研究を取り上げ、福澤の仏教観とそれに対する批判について検討し再評価する。最後に、仏教を含む伝統に対する福澤の批判を考察する。

第1章：福澤の伝統批判に関する先行研究

陳毅立氏は、「福澤諭吉の伝統批判と改革思想一初期の厳復との比較」において、19

世紀にて国際政治状況を考察することを通じて、福澤諭吉と厳復の思想転換の由来を究明し、両者の洞察した前進を阻害する伝統をめぐって考察している³。

陳毅立氏は、福澤の伝統批判の中心は儒学であるが、それは道徳主義に対する批判ではなかったと述べている。福澤は、儒教における政治的や社会的な道徳を集中的に批判している。つまり、君に対する臣、父に対する子、夫に対する妻のような関係を厳しく批判し、市民社会に基づく関係柄を再制度化することに志した。例えば、封建時代の支配下に、「厳しい世襲制と上下名分の説に対する批判ではなかろうか。またなぜ世襲制や上下貴賤の説は日本国民の頭にそのように強く根付いていたのかということ、文明を特徴付ける「自由の気風」の対極にある惑溺な精神状態と結びついていたからである。」と主張している。要するに、「人々は虚偽な妄説を軽信して宗教神仏に惑溺し、或いは所謂聖人の言葉を聞いてそれに何も考えずただ和して、拘束されるという点こそ福澤が最も心配する所である。」と論説している⁴。

次に、西谷氏は、「福澤諭吉における思想の改革と伝統」にて、西洋文明を日本に紹介することによって日本社会が西洋化され、近代化されるように努力したと主張している⁵。また、西谷氏は、福澤が文明論を展開することによって、西洋文明をモデルとして、日本の伝統を批判し、「半開」の段階にある日本の

文明を批判していると述べている。そのために西洋の文物を輸入することより、西洋文明の精神を取り入れることが肝要であると解説している。

西谷氏は、日本人の智徳の進歩に関する福澤の議論を解説している。福澤は道徳が人間の内面に限る限りにおいて、その内容は時と場所と関係なく変化しないのに対して、知識は日々進歩し変化するものである。その中で、福澤が最も重要にしているのは物理学的知識であり、それに伴う科学主義と合理主義である。しかし、福澤はこうした西洋文明の精神が日本に導入される障害、伝統の「惑溺」を批判している。福澤はこうした惑溺的精神を育成したのは儒教であると考えているので、儒教のイデオロギー的や社会的、政治的な教えを徹底的に批判している。その一方、西洋文明の根本的価値観である「自由」と「平等」を日本の一般人をはじめ、日本政府までに訴えて啓蒙しようとしたと主張している。西谷氏は、福澤の考えでは「日本のこれらの伝統を破壊し、新しい精神を導入することによって思想の全面的革新をはかったとすることができる。」と解説している⁶。

次に、梅津順一氏が「福澤諭吉における士族の「資力の変形」」において、福澤の生涯を二つの時期に区分して、伝統に対する彼の批判を提示している⁷。前半は明治初期における「掃除破壊」の時期であり、後半は、「健置経営」の時期であるという。福澤は、明治初期に維新後の人民の無気力が眼に余るものがあつたため、伝統日本を清算するべきであると考えた⁸。当時の日本社会的状態を検討した福澤は、江戸時代から教育の源である儒教主義に基づいている封建門閥制度の破壊掃除に乗り出すことが急務であると考えた。梅津氏によれば、福澤は諸著作で論じて、慶應義塾で文明論や経済などを教授しつつ、近代西洋を伝統日本に対置したという。例えば『学問ノススメ』では、和漢の学問の無益さを口極めて批判し、道理に基づく「日用に近き」学問として「窮理」物理学から経済学にわたる西洋の学問を固く評価した。また、『文明論之概略』では西洋諸国の文明の状態を鏡とし、「半開に低迷する日本の問題状況を明らかにし、「文明の精神」を習得することによって、伝統日本の負の遺産の克服する方向」を提示している⁹。梅津氏は、この点に関して、「掃除破壊」の福澤の課題であった、学問による独立、一身の独立による一国の独立、あるいは文明の精神による日本の文明化による日本の独立の主題は「健置経営」の具体的課題としての、一身の独立にかかわる民権論、一国の独立にかかわる国権論、両者を基礎づける実業論として連続していたからである。」と述べている¹⁰。「掃除破壊」の福澤は、変革と文明化を、近代の新しい原則を、過去からの断絶として、遠慮会釈無く、はっきりと打ち出す必要があると考えている。一方、「健置経営」の福澤は、近代日本の建設を白紙に新しく絵を描くようにではなく、あくまでも過去の遺産の上に、伝統との連続の中で遂行すべきであると考えているというのである¹¹。

梅津氏は、後半においては、福澤が『時事新報』や『分権論』などでは、文明

開化や維新などにかかわった士族の推進力を評価していることを提示している。彼は、「日本の伝統的士族に対して福澤は対照的な二つの評価を与えている」と述べている¹²。明治初期に、文明の名のもとに伝統日本を批判し、士族学者の精神をも「掃除破壊」しようとした洋学者福澤は、明治十年前後より日本の文明化の定着、「健置経営」を目指すにあたって、士族の資力の活用を構想するにいたったというのである¹³。

最後に、赤野孝次氏が「福澤論吉像の研究史的変遷」において、様々な分野に関する福澤の活動を扱う研究を参照しているが、伝統とりわけ仏教に関する福澤の批判の研究がまれであると主張している¹⁴。しかし、赤野氏は「最近の福澤研究」において、坂本孝雄氏が論じる福澤の普遍性と現実性を参考している¹⁵。「普遍」と「現実」の共存を指摘するという点においては、坂本氏は「『国民意識の養成』を課題と知る歴史教育の意義を、「時代の情勢や変化に流されず」、「数百年単位で」考えるべき」であると主張している¹⁶。坂本氏は、福澤の課題である「日本の独立」という現実の課題が、明治時代と今日から将来にかけての日本とでは殆ど変わりがないように思われるとしているのである¹⁷。

第2章：福澤諭吉の仏教観

本節では、疋田精俊氏の「近代啓蒙思想家福澤諭吉の仏教観」を中心に考察する¹⁸。彼は、この論文において、福澤諭吉の啓蒙思想における仏教の位置づけを解説している。疋田氏は、福澤諭吉を含む明治初期の啓蒙思想家は幕末時代に生きていた日本人なので、欧米に派遣留学する前に仏教を含む日本の伝統の素地の中で日常生活を送っていた。そのため、先進諸国の啓蒙思想や文化風俗と習慣、生活態度を習得したことによって日本の旧来の伝統的思想や文化風俗と相いれないこともあり、場合には否定しようとする傾向もあったと主張している¹⁹。ここで疋田氏が福澤を代表したのは、福澤が仏教に関する論文を多く記述したからであり、彼が日本の伝統的諸体制を維持してきた仏教をどのように思考し把握したか論究すると述べている²⁰。

また、疋田氏は、福澤の経歴を語りながら、伝統との関係また接触の仕方を解説している。ここで疋田氏は、主に福澤の『福翁自伝』を使用して下記を検証している。まず、福澤が下級武士の家庭に生まれ、父である福澤百助は厳しい身分制度の宿命を逃れるために諭吉を僧侶にしようと考えていた。つまり、福澤と仏教とのかかわりは出生時にあった。それは封建社会では厳格な身分制度が確立していたので、自力で努力しても、またいかに有能であっても名を成すことができなかつたためである。だが、僧侶社会のみは例外であって、師僧に従事し尽した努力で最高の位大僧正なる栄達の道が開かれていた²¹。福澤が門閥制によって精神的圧迫と窮屈な身分制から脱出する手段として選んだのが蘭学であり、長崎へ行き、寺子屋で儒学に基づく伝統的な教育から洋学の学習へ

変更した。ここで疋田氏は、福澤と彼の兄との比較を行いながら、福澤と伝統とのユニークな接触の仕方を解説している。疋田氏の比較のまとめでは、兄は既存の門閥制を社会秩序として絶対視しているのに対して、福澤は同制度を相対的なものであるとみなしていた²²。

疋田氏の考えでは、福澤が神の御札を踏んだり、稲荷の社を開けて神体を取り替えたりしたことは、幼児頃から内心安堵を覚え、神仏に対する敬虔心が薄く絶対的権威や象徴などを否認する精神が強かったためだという。言い換えれば、福澤は人間の本来的自由平等と矛盾する伝統に挑戦すると共に、迷信邪教を一切受けつけなかったと主張している²³。こうした福澤の行動は、形式だけの尊崇心ではなく、無宗教心をつくった第一の理由であろうと述べている。疋田氏は、第二の理由について、次のように解説している。福澤は、蘭学の塾では生物学や病理学、数多くの西洋の翻訳書を学習し、また在塾中にオランダの物理書や医学書の写本や辞書の作成、原書会読、翻訳などに従事した次第に、近代西欧合理主義の認識を深めていった

。彼は、豚や熊などの生物を解剖実験し心臓や肝臓、目、脳などを客観的な判断力を持って処理するようになり、実践的合理主義及び現実主義を学んだのである²⁴。言い換えれば、福澤は自然原則によって真理の探究と科学的究明の態度を習得したので、物事のまやかしに疑問を抱き、納得するまで徹底的に追及する精神を培った。その結果、「現実と遊離した冥界のことやかかつての低俗な神仏論及び冥罰、更には迷信偽説を打破する心構えを一層深める(略)福澤の無神論的精神を強いる由縁」となったと論じている²⁵。

疋田氏の考えでは、福澤は信仰を否定し、信心を必要としない人ではなかったという。福澤は仏教理論を探求しながら次第に信仰心を抱くのではなく、実際は宗教を習俗的な信仰といった受け止め方しかしていなかったようである。つまり、仏教を一つの宗教習俗とか習慣的なものとして考えた論じている。疋田氏は、日本では仏教の信仰が日本人の心に浸透したというより、先祖から継承されてきたものであると考えている。換言すれば、無信仰心を基調としていることを考えれば、真宗は自分自身が選択した宗門でではなく、何宗旨でもよいのであって、先祖の宗旨として継承したにすぎないというのである。それは、従来の習俗とか伝統に対する一種の迎合観であり諦観的姿勢とみるべきであろうと述べている²⁶。

疋田氏の考えでは、福澤はそもそも仏教に無関心であるが、伝統の象徴である寺院や外形的なものには人々の信心を蘇らせる何物かがある故尊重すべきであるという。また、先祖供養や宗旨、所属は家代々の仏教習俗として、伝承されてきたものなので、信仰心の有無に関係なく、人間の務めとして保持すべきであるという考え方が強かったのであると解説している²⁷。続いて、疋田氏の考えでは、福澤は信仰心などを全く持っていないが、社会的安定のために仏教を含む信仰が絶対的に必要であり、宗教信仰を人々にすすめていることには矛盾があると主張している。宗教は個人に安心を与えると共に、国民の多数派である愚民の心を緩和に

し、国内の治安を維持する力があり、政治や法律によって制裁と罰則は有形部分に適応されるだけで、無形の精神領域を支配するには宗教の機能に依存することが必要なのである。無宗教の社会となると、愚民の心は荒廃し罪悪加害の頻繁することは必然であると解説している²⁸。

疋田氏は、福澤における宗教に対する維新政府への対応の仕方を批判している。福澤は、明治政府が伝統的な宗教を無理に破壊した結果、政治において社会的反乱を起こしたので、その新政府を激しく批判すると共に、日本社会の建て直しに宗教の必要性を力説したのであると論じている。また、福澤は宗教の正当性より国権の利害を考察すれば仏教の力が必要であることを諸論文に強調したと述べている。また疋田氏は、福澤が宗教を社会的な機能の一つである集団への凝集性または統一性に大いに利用することを考えたと述べている。一方、疋田氏は、日本の諸宗教に対する福澤の態度について次のように解説している。福澤は

諸宗教の中で最も人心に効果的な力を及ぼすのは仏教であると考えている。それは、神道を宗教として見ていない一方で、儒教は日本人の人心を維持する力がなく、またキリスト教は外教であるので、仏教に依存して維持する外ならぬと考えているからである。疋田氏の考えでは、福澤はキリスト教と関連性がある欧米文化を導入した啓蒙思想家であるが、外教の危険性を懸念しながら、防止策に政府や学老達の力を借りず、仏教の力に依存して対処しようとしたことが持論であると述べている²⁹。また外教を阻止した理由として、外教は唯一神論の立場から布教上みだりに他教を攻撃する特質であるためであると考えている³⁰。

続いて疋田氏は、福澤における仏教の保護説について次のように論じている。彼の考えでは、福澤を含む明治期の知識階層者の特徴は、明治初期にて厳しく攻撃された仏教の荒廃についてひどく憤慨し批判した。例えば、明治初期に蔓延っていた、仏教の僧侶の腐敗や墮落などは、仏教自体が衰退しているという意味ではないと指摘している。福澤は、仏教と僧侶の関係を考えれば、僧侶を排斥したり仏教に敵対したりするのではなく、僧侶を含む仏教の猛省を求めることによって仏教の発展を大いに期待したのである。それは、上述したように、国家治安と社会安定を維持するには仏教の教化力を借りる必要があるからである。また、疋田氏は、福澤は単に仏教の腐敗を批判するにとどまらず、それらを払拭して正常化する方法を次々に提案したことを指摘している。福澤は、富国強兵とアジア進出を主張し、そのために徴兵制度を支持したことについて解説している。福澤は明治政府が27年に「僧侶の徴兵免除」を発表した方針に同意した。ここで疋田氏は、福澤の反対の理由について、「一旦有事のとき銃剣をとり殺生行為を荣誉とするが如き兵役を、平然と僧侶に義務付けることは全く馬鹿げている故、早々に廃止するよう政府当局へ反省を求めた」と述べている³¹。

疋田氏は、結論にて、福澤は西洋文明の啓蒙思想家であったが、宗教について議論することを好まず、むしろ無関心な態度を貫いた人物であると形容している。福澤の著作とりわけ『時事新報』や『福翁自伝』、『福翁百話』などには宗教に関する記述が多くあるが、宗教の理論や教義の真偽正邪批判文はほとんど見られないという。つまり、福澤にとって宗教は領域外の出来事のように扱っていたといえる。また、福澤は経験に基づく知識を信じる人なので、浄土思想や死後の世界について信じてはいない。彼は、少年時代に経験した稲荷信仰や神仏札の罰当り説を迷信邪信と思考した例もあり、その後近代啓蒙思想家となっても、変わらず死後の世界を誰も実際に経験し実証できない世界であると考えていた³²。しかし一方、福澤は仏教を排斥して軽視することもなかったという。日本人の一般の信仰態度と同様で、寺参りや墓参などの宗教行為は日常生活における習慣とか習俗として行った態度である。」と述べている。続いて、明治時代になると、福澤の思考は国家の治安と社会安定を保つことや外教の危険を阻止することへ変更し、仏教の教化力の必要性を強調したと主張している³³。

上記のように、福澤の宗教観に関する疋田氏の解説には矛盾がある。疋田氏は、福澤自身は無宗教無信心と言いつつ、人生経験の中の福澤は仏教の本意を理解し、その偉大性を認識していたという矛盾が明らかであろう。

第3章：福澤の伝統批判を再評価

3-1. 先行研究を評価

前章では、日本の伝統に対する福澤の批判を取り扱ってきた研究を紹介してきた。その中で、仏教や神道などに対する福澤の批判を取り上げる研究よりも、福澤の批判を儒教と結びつける研究が多く評価されている。本稿では日本の伝統の支流の一つである仏教を批判した福澤の考えを焦点に当てた研究を中心に考察していく。従来の研究においては、福澤の伝統批判が判明された箇所は多くあるが、筆者が指摘したい点を以下に記す。

第1章で触れたように、「福澤の伝統批判に関する先行研究」にて、陳毅立氏の「福澤諭吉の伝統批判と改革思想—初期の嚴復との比較」を紹介した。陳毅立氏は、儒教は福澤の伝統批判の中心であるが、道徳的面だけではなく、政治的面も彼の批判の中心であると主張している。筆者は上記には全くその通りだと考えており、福澤の批判は儒教のあらゆる面が対象とされていた。しかし、筆者は、陳毅立氏が「人々は虚偽な妄説を轻信して宗教神仏に惑溺し、或いは所謂聖人の言葉を聞いてそれに何も考えずただ和して、拘束されるという点こそ福澤が最も心配する所である。」と論説する箇所に同意していない。福澤は、多くの著作、とりわけ『福翁百話』と『福翁百餘話』などにおいては、政治と社会の安定を保つため宗教を利用するように奨励している。

次に、西谷氏は、「福澤諭吉における思想の改革と伝統」にて、福澤が日本の伝統を批判することを通じて日本社会が西洋化されることを目指していたと主張している。筆者は、この点においては同意していない。福澤は、真に日本社会を西洋化することを目指しているのであれば、福澤の独自の啓蒙思想の論理が生ずることなく、ただの翻訳者あるいは紹介者とする立場にとどまっていると考えられる。また、西谷氏は伝統に対する福澤の批判を解説しているが、彼がどのような伝統を意味しているかを明白に述べていない。西谷氏が、福澤が廃除したい伝統が儒教的なそれを指しているとしても、福澤における著書には儒教を徹底的に破壊させるような記述は無く、場合によって日本の近代化と国権のため儒教を利用するようにすすめていることから、西谷氏の解説には矛盾が生じている。

次節には、第2

章で触れた仏教に関する研究を再評価する。同章では、疋田精俊氏の「近代啓蒙思想家福澤諭吉の仏教観」を検討の対象とする。疋田氏は研究の目的として、仏教に関する福澤の論説が多くあるので、啓蒙家の中で近代化に衝突した日本の伝統を批判した福澤を選抜したと主張している。しかし筆者は、上記の点には同意していない。実際に、筆者は福澤の全集を調査し、検討することによって、仏教に関する福澤の著作や論文がないことを確認している。さらに、仏教という単語に関する福澤の記述ですら非常に少ないのである。

最後に、筆者は、疋田氏の上記の議論、所謂福澤の宗教観に関する解説には矛盾があると考えている。疋田氏は、福澤自身は無宗教無信心と言いながら、人生経験の中の福澤は仏教の本意を理解し、その偉大性を認識していたという矛盾が明らかであろう。

3-2. 福澤の伝統批判

このように、様々な研究において、福澤は日本の古来の伝統に対して厳しく批判したことが強調されている。本節では仏教を含む伝統に対する福澤の批判を明確にして経済や教育、政治などの面において考察する。

まず、経済の観点から伝統への福澤の批判を見てみよう。福澤は、『帳合之法 初編

一』において、古来日本の伝統的教育には、学問と家業の間に関連がないため学者は貧しく、百姓や町人は無学であると説明している。また、「益軽蔑せられて地にも入らんとするの勢にて互に近づくことなし。或は好事の百姓町人少しく書を読んで学者の真似をする者あれば無用の漢文詩歌にふけり物の数を知らず、金銭の勘定を忘れ、家業の便利には為らずして必ず身代を破るに至れり。」とも述べている³⁴。このことから、福澤は伝統教育が決して実用的ではなく、学問が日常生活に貢献することがなかったと説いている。続いて、福澤は数百年來和漢の学者は虚文空論に溺れて実学を求めなかったことは、下民を愚にした罪であるという。従って、その空論から離れて、日本の経済を養う新世代

には「付今此帳合の法を諸処の学校に用て生徒の読本と為し、平民の子弟或は其学びしことを家に帰て父兄に語るべしとせば、父兄も始て洋学の実なるを知り安心して其子弟を学問の道に入るべし者次第に多かる可し。」と洋学の必要性を主張している³⁵。

次に、学問の観点から伝統への批判を見てみよう。福澤は、日本の古来の伝統が学問として実用的ではなく、日本の近代化に貢献する知識ではないと考えている。彼は、『学問ノススメ』において、次のように述べている。

学問とは唯むつかしき字を知り解し難き古文を讀み和歌を樂み詩を作るなど世上に實のなき文學をいふにあらずこれ等の文學も自から人の心を悦ばしめ随分調法なるものなれども古来世間の儒者和學者などの申すやうさまであがめ貴むべきものにあらず古来漢學者に世帯持の上手なる者も少く和歌をよくして商賣に巧者なる町人も稀なりこれがため心ある町人百姓は其子の學問に出精するを見てやがて身代を持崩すならんとて親心に心配する者あり無理ならぬことなり畢竟其學問の實に遠くして日用の間に合はぬ證拠なりされは今斯る實なき學問は先づ次にし専ら勤むべきは人間普通日用に近き實學なり³⁶

以上のように、福澤の考えでは、学問とは「人間普通日用に近き實學なり」と定義している。一方、日本の古来の伝統的学問は一般の日本人は理解しにくい漢文或いは古文を用いて物事を説明しているため、和歌や詩などの文学のように日常生活から離れて人を喜ばず知識であると批判している。また、福澤は人類の発展のため、「智恵と徳義」に基づく教育が必要であるが、古来の日本の伝統は「古来學者の論ずる所を見れば、十に八、九は徳義の一方を主張して事実を誤り」と批判している³⁷。

福澤は厳しく批判された仏教に同情もせず、仏教を含む伝統を徹底的に排除することを目的としなかったと考えられる。福澤は、日本の伝統的宗教に対する軽蔑、或いは敵対心などはないが、実は彼の考えは場所と時間と状況という三つの条件に従って相対するのではないかと筆者は考えている。つまり、福澤の思想は相対的価値判断であるといってもよいのである。換言すれば、福澤は啓蒙思想家として日本の伝統を峻烈に批判しているが、こうした伝統はいつかの時代の要請に必要であるので、消滅させたいという考えは持っていない。それは、福澤が想定した文明開化の基準に見える。「文明」と「半開」と「野蛮」は、彼の相対的基準によって生じた文明の三段階である。要するに、この三つの状態は不変的ではなく、相互に相対して智徳の発達が進化によって順位が変わり、「今の時に当て、前に進まんか、後に退かんか、進て文明を逐わんか、退て野蛮に返らんか、唯進退の二字あるのみ。」と主張している³⁸。つまり、絶対的であるという考えを抱かない福澤は、文明は相対的であるので、現段階では欧米諸国は文明国であっても、それは文明の最高の境界ではないと考えている。

むすび

以上をまとめると、福澤は相対的観点から仏教を含む日本の伝統を考えているとあって良い。要するに、伝統であれ近代であれ、思想は薬箱のようであるので、あらわれた症状に伴ってその思想の必要性が生じるという福澤の最もユニークな考え方である。こうした彼の相対性は『文明論之概略』にて次の例から把握できる。彼は、「軽重、長短、善悪、是非等の字は相対したる考より生じたるものなり。軽あらざれば重あるべからず、善あらざれば悪あるべからず。故に軽とは重よりも軽し、善とは悪よりも善しと云うことにて、此と彼と相対せざれば軽重善悪を論ずべからず。斯の如く相対して重と定り善と定りたるものを議論の本位と名く。」と述べている³⁹。ここで福澤は、善悪や真偽、美醜など無形的な価値を、軽重や短長などと同様に相対的に図って扱っている。このように、物事に対する福澤の相対的認識は、彼の思想の特徴の一つである。

注

1. 福澤諭吉、『文明論之概略. 卷之五』、東京 1875年 P.43
2. 例えば、丸山眞男の研究に代表させて批判したもの
(安川寿之輔「日本の近代化と戦争責任—戦後責任論」1994年；西部邁『福澤諭吉』1999年；『講座派』的な立場に代表させて批判したもの
(坂本多加『新しい福沢諭吉』1997年などである)
3. 陳毅立、「福沢諭吉の伝統批判と改革思想—初期の厳復との比較」『大学院紀要』56, PP.189-200, 2006年3月、P.189
4. 上掲書 P.198
5. 西谷敬、「福沢諭吉における思想の革新と伝統」『人間形成と文化』3, PP.25-37, 1999年
6. 上掲書 PP.30—37
7. 梅津順一、「福沢諭吉における士族の「資力の変形」について：
伝統と近代のあいだ」『青山學院女子短期大學紀要』47巻PP.145-176, 1993-12-10
8. 上掲書 P.145
9. 上掲書 P.146
10. 上掲書 P.173
11. 上掲書 PP.172-3
12. 上掲書 P.146
13. 上掲書 P.147

14. 赤野孝次氏は、「福澤諭吉像の研究史の変遷」『史苑』62(2)、PP.77-89,2002年3月
15. 坂本孝雄、『象徴天皇制度と日本の来歴』、都市出版 1995年、『新しい福沢諭吉』、講談社 1997年
16. 「福澤諭吉像の研究史の変遷」 P.84
17. 上掲書 P.85
18. 疋田精俊、「近代啓蒙思想家福澤諭吉の仏教観」『智山学報』30, 119-134, 1981-04-30
19. 上掲書 P.119
20. 上掲書 P.120
21. 上掲書 P.120
22. 上掲書 P.121
23. 上掲書 P.121
24. 上掲書 P.121
25. 上掲書 P.122
26. 上掲書 P.124
27. 上掲書 PP.124-5
28. 上掲書 P.125
29. 上掲書 PP.125-6
30. 上掲書 P.127
31. 上掲書 PP.127-8
32. 上掲書 P.131
33. 上掲書 P.132
34. 福澤諭吉、『帳合之法. 初編. 一』、東京 1873年 P.8-9
35. 上掲書 P.8
36. 福澤諭吉、『学問ノスス・初編』、東京 1872年、P.7
37. 福澤諭吉、『文明論之概略. 卷之三』東京 1875年、P.21
38. 『文明論之概略. 卷之一』 P.41
39. 上掲書 P.17